大河津分水の理解度向上のための水辺と土木遺産の利活用

燕市企画財政部地域振興課　佐野　大輔
○正会員　株式会社エコロジーサイエンス　樋口　勲

1.　はじめに

河川空間をイベントや商業施設として利用するミズベリングや，ダムや堰などの土木施設を巡るインフラツーリズムなど，水辺や土木施設を地域活性化や観光資源として利用する動きが活発化している．今回報告する大河津分水は良好な水辺を有するとともに，我が国を代表する土木遺産であり，多様な利活用が望める．一方で，大河津分水の理解度は低く，その傾向は近年，顕著に現れている．そこで，大河津分水の管理者である国土交通省北陸地方整備局信濃川河川事務所の協力を得て，地元自治体の燕市や地域住民が協働で，水辺と土木遺産を活用したイベントを企画・実施した．協賛社である株式会社エコロジーサイエンスがその効果と今後の可能性を検証し報告する．

図 1　大河津分水の位置

2.　大河津分水の理解度

大河津分水は越後平野の洪水被害軽減を目的に大正 11(1922)年に通水した人工河川であり，以来，この地の人々のライフスタイルは一変した．今なおその恩恵を享受し続けることができ，そのストック効果は計り知れない．大河津分水の発想は洪水被害で苦しむ地域の人々から生まれ，私財を投じた大河津分水建設請願活動は江戸時代から 200 年にわたり，その活動に加わった者は 100 人を超えた．このような背景から「公共事業の原点」と称されることもあるが，信濃川大河津資料館来館者データや雑誌のインタビューから，その理解度・認識度は低く，若い世代にその傾向が顕著である．

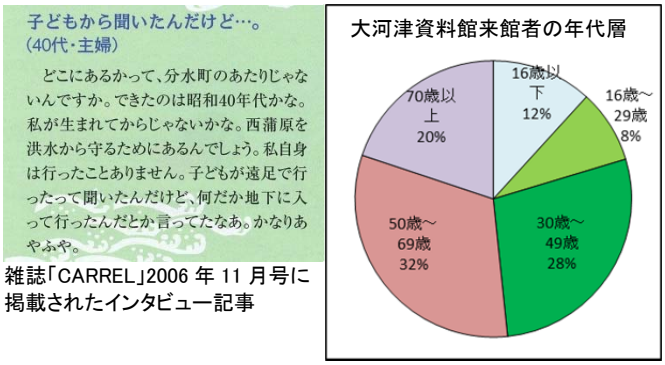

図 2　雑誌記事と信濃川大河津資料館来館者年代層

3.　水辺と土木遺産の活用と地域連携

大河津分水分派点周辺は大河津分水公園として整備され，川遊びやバーベキュー等の野外活動ができるほか，文化財の堰や青山士・宮本武之輔ゆかりの石碑，資料などがあり土木遺産としての価値も高い．一帯は国定公園に指定されており風光明美な景観を形成している．また，大河津分水建設の契機となった信濃川の水害「横田切れ」(1896 年発生)から 120 年前の節目を迎えることもあり，このような良好な水辺の景観と，歴史や文化的要素を含む土木遺産を融合させたイベントを実施し，大河津分水の周知効果と理解度の検証を試みた．なお，イベント経費には河川財団の助成事業が活用された．

図 3　大河津分水公園周辺の地図

キーワード　大河津分水，水辺の利活用，インフラツーリズム，土木遺産，ミズベリング
連絡先　㈱エコロジーサイエンス　〒940-0085　新潟県長岡市草生津 3-5-25　TEL.0258-94-7321　FAX.0258-94-4062

4. イベント実施にあたっての留意点

大河津分水通水が越後平野発展の契機・礎となったことから，その効果や役割を含めて大河津分水に感謝する意味で，イベント名称を「大河津分水サンクスフェスタ」とし，開催日は通水日に近い休日を選択，内容は子育て世代や若者など，大河津分水への関心が低いと考えられる人々から関心を持ってもらえる内容とした．

開催時刻 イベント名	内容 （ ）内は参加者数
10:00～12:00 水辺のいきもの探検隊	川に入って魚などの水生生物を捕獲し観察（31人）
14:00～15:00 キャンドル☆凧づくり	地域の就労支援施設にワークショップを依頼（48人）
15:10～16:30 みずベトークライブ	地元FM放送のパーソナリティによる川トーク（71人）
17:00～17:50 Okzアニバーサリーコンサート	地元にゆかりのアーティストによるフルートコンサート（127人）
17:50～18:20 洗堰DEキャンドルナイト	登録有形文化財の堰を手づくりキャンドルで彩る

図 4 イベント内容とそのチラシ

5. イベントの実施結果

来場者へのアンケート結果から，若い世代や子育て世代が多く来場されたこと，大河津分水への来訪回数が 5 回以上のリピーターが多いことが確認された．

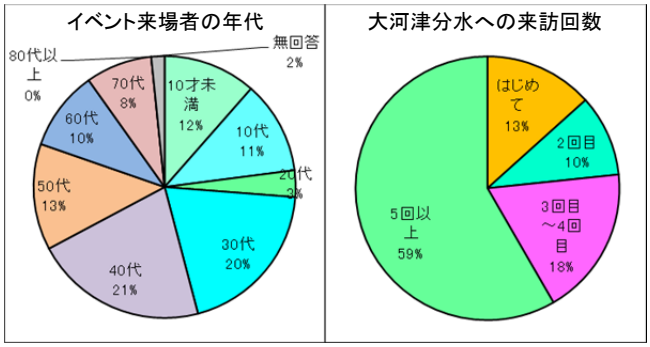

図 5 イベント参加者層

イベントへの参加理由は「楽しそうな内容だったから」が最も多く，評価がそう悪くないことから来場者の期待に応えられたと考えられる．

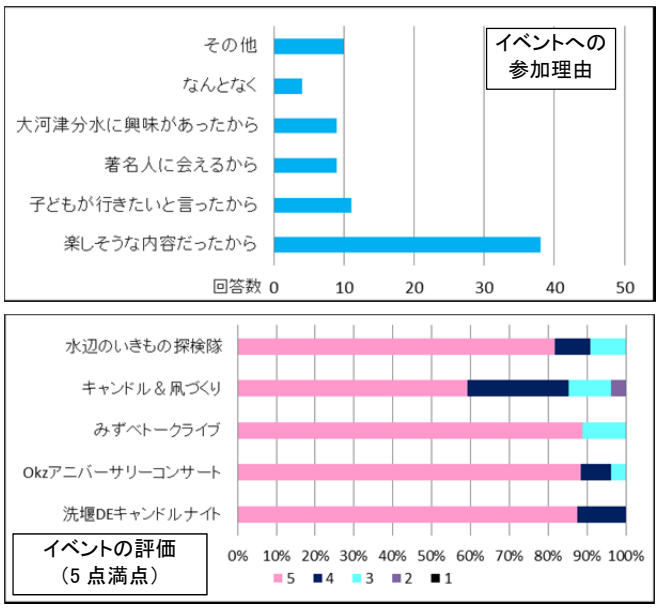

図 6 イベントへの参加理由と評価

また，大河津分水が人工河川であるという認識は高いが，今後の改修事業については，その認識度が半数程度にとどまった．

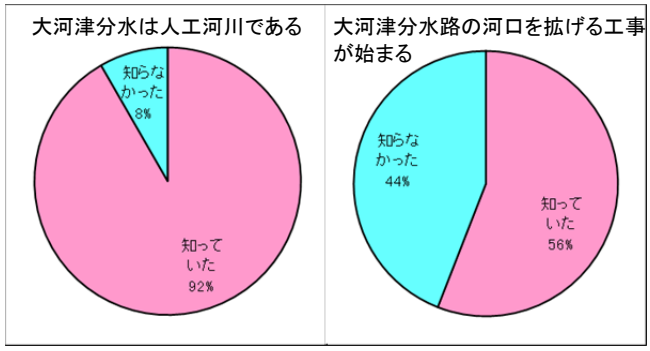

図 7 大河津分水の認識度

6. 今後の取り組み

今回のようなイベントの継続を望む声が多く寄せられたこと，リピーターが多いことから，大河津分水に潜在的に関心がある若い人々が多いと考えられる．このような人々を巻き込み，広報役を担っていただくことは，多角的な効果を生み出し，地域活性化や観光資源としての魅力創出だけでなく，継続的な河川事業の理解促進にも大きく貢献する．また，このような良好な結果の最大要因として河川管理者，地元自治体，地域住民の連携が挙げられる．今後も各組織が win-win の関係性のもとで，このようなイベントを継続実施することが望まれる．